町民参加の町史づくり

竹富町史だより

1992. 9 .30(水)
第 2 号

竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2 - 9985

目次

町史編集委員長あいさつ……(1)
第五回町史編集委員会……(2)
町史巻別・編別構成の一部改正……(3)
第十二巻資料編「戦争体験記録」発刊要綱……(4)
戦争体験記録の募集……(7)
第十一巻「新聞集成」発刊要綱……(8)
戦前の新聞……(10)
写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」発刊要綱……(11)
《歴史の証言》
浦内川の大洪水……(13)
文化短信……(16)
《写真に見るわが町》……通事孝作……(17)
県地域史協議会研修会……(18)
《戦跡をたずねて》……通事孝作……(19)
大嵩家板証文……通事孝作……(20)
《文化財探訪》……通事孝作……(21)
《聖地めぐり》……通事孝作……(22)
《新聞で知る町の今昔》……(23)
収蔵図書……新盛勝一……(24)
業務日誌……(28)
編集後記……(31)

表紙の写真

水牛車でサトウキビ刈り取りへ行く大富の農家を撮った写真である。1963年（昭和38年）2月で繁忙な時期だ。写真の中心は農家だがバックに写しだされたカヤぶき民家、舗装されていない道路に歴史を感じさせる。（写真提供・大谷用次さん）。

☆ 題字　大城正明

ごあいさつ

竹富町史編集委員会
委員長　當　山　哲　男

このたび、竹富町におかれまして、町史編集室を設置し、本町の歴史の本格的な集大成に向けて取り組んでおりますことは近年にない快挙であり、皆さんとともにまことに喜びにたえない次第であります。

小生、はからずも委員長の重責を担わされておりますが、委員の皆様はもとより町民の皆様とともに微力を尽くして参りたいと存じております。なにとぞご指導ご支援を賜りたくお願い申し上げます。

顧りみまするに、本町には昭和四十九年に『竹富町誌』同五十三年には『町制三十年のあゆみ』を刊行していますが、そのとき産業経済等の原稿を執筆、編集委員を務めたことがありますことだけに感慨ひとしおなるものがあります。

申し上げるまでもなく竹富町の歴史は私たちのこの郷土において祖先がつくり上げてきたものです。従ってこれに学び、さらにそれを未来へ向けて生かしていくべく努めていくことは、私たちに課された責務であると信じています。この意味で私たちの歴史をまとめる作業が町当局において着々と平成元年より進められていることは、まことに意義深いことであり、この機会を生かすべく、町史編集室を中心に私たち委員もできるだけの努力をするつもりでおります。

しかしながら、この事業は短期間にしてできるものではなく、また、一人や二人の関係職員によってなし得るものでないことも当然で、広く町民更には全八重山住民及び郷友会の力をいろんな形で生かしていくことが求められているといえます。

そのためには、町民が積極的に参加し、語り、成果を発表することが必要と存じます。町民からの情報は、町史編集室で消化吸収され町民に伝えられることになります。そのような中からよりすぐれた証言記録や新たな資料がもたらされ、町史に反映できれば、それだけ高められた理想的な町史づくりができるものと確信しております。

町と町民が一体となり、竹富町の過去と現在との対話の中から、未来に向けメッセージを発することにより、郷土をみつめ、郷土を愛する心を培い、竹富町の未来を築くことに資しうれば、『竹富町史』を編集、刊行することは、十全の意義があるものと考えられます。

「竹富町史だより」の副題にもありますように、「町民参加の町史づくり」をめざして取り組んでおりますので、今後とも町民のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成四年九月

第五回町史編集委員会開く

第五回町史編集委員会が、八月十五日午前十時三十分から町史編集室会議室で開かれ、三件について審議を重ねました。最初に當山哲男委員長が「新聞記事の選択、町史だよりの発刊など編集作業は順調に進んでいます」あいさつ。引き続き事務局が経過報告を行い、審議に入りました。

今回の審議案件は①「戦争体験記録」の編集要綱②「新聞集成」の編集要綱③写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」の編集の三件でした。「戦争体験記録」は当初、第十巻資料編として平成六年度に発刊する計画だったが、巻と資料編題目を統一させるため、第十二巻資料編とすることを決めました。発行年は平成七年度としました。「戦争体験記録」は満州事変ぼっ発（一九三一年）～太平洋戦争終結（一九四五年）までの戦争期間中のほか日本復帰（一九七二年）までの戦後も範ちゅうに入れ戦前、戦中、戦後の体験を明らかにし戦史の証言として後世に伝えることを基本目標としています。記録方法は町民のほか県内、本土に在住する町出身者、戦時中、町に駐屯していた軍隊、戦後復興、を町内で体験した者などを対象に原稿依頼、聞き取り調査を行い、編集を進めます。原稿は平成五年三月を締め切り、とし今後関係者に執筆を依頼していきます。記録項目は①開戦への道②軍隊の戦場での体験③戦争と疎開体験④戦争中の住民生活⑤資料実態調査にみる戦争⑥戦後復興―を盛り込みます。調査に向けては今後、記録委員会を設置して取り組みます。

「新聞集成」は明治三十一年から昭和四七年までの期間、町関係の記事を選択し、資料編として発刊するものです。新聞は「琉球新報」のほか八重山のローカル紙を扱います。巻別は十一巻とし、同巻は明治・大正編（平成五年）、昭和戦前編（平成六年）、昭和戦後編（平成八年）に巻編成して発刊します。収録記事については今後、専門委員会を開き、決定することを決めました。写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」は平成四年度に発刊する計画です。委員会ではテーマを検討するとともに索引をつけることを決めました。写真選択は八重山在住委員が行うことになりました。写真は地域での収録二八七七枚、町役場所蔵の七二一二枚となっています。

竹富町史の巻別・編別構成の一部改正

巻別					
当初計画			改定後		
巻	編	年度 平成	巻	編	年度 平成
1	通史編（全）	15	1	通史編（全）	15
2	竹富島編	8	2	竹富島編	8
3	小浜島編	9	3	小浜島編	9
4	黒島編	10	4	黒島編	10
5	新城島編	11	5	新城島編	11
6	鳩間島編	11	6	鳩間島編	11
7	波照間島編	12	7	波照間島編	12
8	西表島東部編	13	8	西表島東部編	13
9	西表島西部編	14	9	西表島西部編	14
10	資料編・前近代、近代	5	10	資料編・前近代、近代	8
	資料編・新聞集成（Ⅰ）	5	11	資料編・新聞集成（Ⅰ）	5
	資料編・新聞集成（Ⅱ）	8		資料編・新聞集成（Ⅱ）	6
	資料編・戦争体験	6		資料編・新聞集成（Ⅲ）	8
	資料編・社会・産業	7	12	資料編・戦争体験	7
	資料編・郷友会	7	13	資料編・社会・産業	9
			14	資料編・郷友会	9
別巻	①通史編・総索引	16	別巻	①通史編・総索引	16
	②竹富町関係文献目録	2	〃	②竹富町関係文献目録	2
	③写真集	4	〃	③写真集	4
	「写真にみる竹富町のあゆみ」			「写真にみる竹富町のあゆみ」	

第五回町史編集委員会で町史巻別・編別構成が一部改正されました。通史編と島々編、別巻は当初計画と同様ですが、資料編は最初、全て十巻で統一しよう、しましたが巻名と題目を一致させた方がよい、とのことで第十巻から第十四巻に分けました。第十一巻資料編は「新聞集成」で三編構成で発刊する計画です。明治大正編は記事数が一千二百五十一件、昭和戦前編は一千六百八十二件に達し今後、記事評価を行い専門委員会で収録件数を決めます。昭和戦後編は、両編が発刊された後、具体的な編集作業に入ります。昭和戦後編は、本土復帰までを扱いますが、記事数はかなりあります。そのため二編になる可能性があります。

第十二巻資料編「戦争体験記録」の発刊要綱

―はじめに―

本戦争体験記録は、竹富町史編集基本構想及び編集計画等を踏まえ竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」として編さんする。

本町の第二次基本構想の中で謳われている将来像「日本最南端の大自然と文化の町―自然・文化・未来」の中、文化については、文化の息づくまちづくり―伝統と歴史を背景に生まれた、豊かな文化をまもり、さらに新しい時代の潮流に対応した創造的な町を建設していくためにはやはり歴史に対する明確な判断が重要になってくる。私達は先人が築き、あるいは体験してきた歴史を考察していくことによって、現在を正しく認識することができ、未来へのわが竹富町のあるべき姿を展望することができる。

わが国における戦争の歴史は、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、いわゆる一五年戦争の終結に至るまでを中心としている。本編は、戦後復興を視野に入れた戦争体験（戦前、戦中、戦後）の聞き取り調査、体験者記録、戦災実態調査、戦後の復興記録を収録する。特に太平洋戦争における沖縄戦は、沖縄の歴史上、日本全体の歴史の上から見ても大きな悲惨な出来事であり、人命と財産を奪い人々はかつてない不幸な体験をしてきました。しかし激烈な地上戦が展開された沖縄本島とは異なり、本町（八重山）では地上における直接の対戦はなかったものの、米、英軍機による空襲をはじめ地上戦に備えて特に西表島に「船浮要塞」（昭和一六年）が建設され、重要な軍事上の拠点と位置づけられ住民の郷土防衛隊をはじめ駐屯軍と徴用軍雇傭人供出、台湾に及ぶ島内外への疎開、山岳地への避難、マラリア猖獗、徴兵と出征の戦闘参加など色々なことが起こり、その間住民は、多くの犠牲者をだしました。また戦後、住民は社会治安の不安定と食糧難の中にあって治安維持安定に努め、更に産業、教育、文化の復興にあらゆる苦難を克服してきました。

戦争が終結してからすでに四七年になり半世紀に達しようとしているなかで、当時の戦争体験者も年々高齢化し、その聞き取り調査は急を要し、なかにはすでに亡くなられた方や、過疎化が進行するなかで転出した方も少なくありません。この時にあたって町民の「戦前・戦中・戦後」体験記録を速やかに集成し正しく記録し、戦史の証として後世に伝えていくことは大切なことである。したがって、別紙編集要綱をステップに、「戦争体験記録の基本目標・方針」「戦前・戦中・戦後体験記録収集項目」「戦後復興体験

記録収集項目」「体験記録募集要領」に基づき戦災実態調査等も踏まえ編さん作業を進める。

「戦争体験記録」に関する基本方針・目標

一、基本目標

町民及び県内、本土に在住する町出身者等（郷友会）の戦前、戦中、戦後の体験記録を、戦史の証言として後世に伝える。

二、基本方針

(イ) 竹富町における戦争の実態を明らかにしていくため、町民及び県内、本土に在住する町出身者（郷友会）等の戦前、戦中、戦後の体験を収録する。

(ロ) 沖縄本島をはじめ石垣、宮古、台湾、中国大陸、南方等の地域で軍人、軍属、学徒として、あるいは疎開、戦災状況、避難民として過ごした人々の戦前、戦中、戦後体験を収録する。

(ハ) 戦争への道程と批判、反省がどのようになされたかを明らかにする。

(ニ) 対象期間

満洲事変一九三一年（昭和六年）～日中戦争一九三七年（昭和一二年）～太平洋戦争一九四五年（昭和二〇年）～本土復帰一九七二年（昭和四七年）

三、記録の方法

(イ) 町民をはじめ、県内、本土に在住する町出身者（郷友会）等の戦争体験者等の原稿を募集する。

(ロ) 聞き書き調査の方法により戦争体験の記録を広く求める。

(ハ) 本巻は、竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」として刊行する。

四、記録委員会の設置

竹富町史編集委員、編集調査協力員他の記録調査員で構成し主として聞き書き及び実態調査を行う。

五、記録の募集要領

別紙、戦争体験記録の募集要領

六、広報活動

懸垂幕掲示、新聞、「竹富町広報」「竹富町史だより」その他の方法で広報活動を展開する。

七、戦史関係の資料の収集

文書、写真、日記、書籍、物品、その他の関係資料の収集に努める。

戦前・戦中・戦後体験記録収集項目（参考事例）

一、戦争体験期間

・満洲事変一九三一（昭和六）年に始まり

・日中戦争一九三七（昭和一二）年を経て

・太平洋戦争一九四五（昭和二〇）年八月一五日の敗戦まで

二、戦時体制に関すること

△軍国主義教育　△出征　△四大節

△八重山郡教員思想事件△思想統制△在郷軍人会　△常会　△標準語励行運動（方言札）　△大政翼賛会　△戦意高揚（精神作興）　△献納運動　△隣組　△物資配給　△警防団　△慰問△紀元二六〇〇年　△青年学級　△日本軍の進駐　△陣地構築　△軍事教練△防空演習　△自警隊　△避難訓練△竹槍訓練　△諸物資供出　△土地接収　△避難生活　△飛行場の建設　△強制貯金　△徴用　△勤労奉仕隊　△強制移住　△朝鮮、台湾人労働者　△職場　△炭坑労働者　△住民生活　△慰安所　△捕虜　△野戦病院　△その他

三、空襲に関すること

△町内（八重山）における空襲の状況△陣地　△学校　△諸官庁、民家等の破壊状況　△台湾沖航空戦　△機銃掃射　△艦砲射撃　△空襲の激化と避難状況　△その他の地域での戦争状況

四、疎開・避難に関すること

△島内外強制疎開　△集団疎開と縁故疎開、台湾疎開　△遭難　△避難先での生活　△マラリア　△疎開から帰郷までの生活　△その他

戦後復興体験記録収集項目（参考事例）

一、戦後体験期間

敗戦一九四五年（昭和二十年）八月十六日～本土復帰一九七二年（昭和四七年）五月一五日まで

二、産業の状況

△農業　△水産業　△林業　△畜産△養蚕　△商工業　△その他

三、マラリアの猖獗と食糧難に関すること

△マラリアとのたたかい　△食糧、諸物資の欠乏　△窃盗の横行　△ヤミ船△その他

四、行政及び教育に関すること

△八重山支庁及び役場の状態　△マラリアの防遏　△疎開者の帰還推進　△戦争孤児、寡婦　△孤老の救済　△行政の変遷　△学校教育文化の復興　△学制の改革　△ＰＴＡの発足、活動△その他

五、自治の胎動と米軍の進駐

△自治会結成（部落会）　△夜警団△自警団　△町村有地　△国有地　△米海陸軍の進駐　△マラリア患者の救済及び防除　△新八重山支庁の復活△八重山議会　△物資の配給　△諸官庁の設置　△八重山民政府の設置　△軍政府駐在　△紙幣の交換　△八重山復興博覧会　△自治意識の高揚　△群島政府時代　△開拓　△強制移住　△治安　△その他

六、衣食住

△衣類　△食糧　△住宅　△その他

七、交通・通信

△車　△船舶　△電信電話

八、医療事情
△医師不足、医介輔

九、その他
△御真影の処置　△メーデー事件
△石垣島戦犯事件

戦争体験記録の募集要領

一、募集対象者
イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富町民。
ロ、竹富町民で戦争を体験されたことのある方。
ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町出身者。
ニ、戦後復興で（生活等）竹富町内で体験された方。
ホ、当時、竹富町に駐屯していた兵隊等。

二、記録の対象期間
一九三一年（昭和六年）満洲事変～一九七二年（昭和四七年）五月一五日本土復帰まで。

三、記録のテーマ
別頁の「記録収集項目」等参考にする。

四、原稿の枚数
四百字詰め原稿用紙の五枚～二〇枚程度

五、原稿の締切
平成五年三月末日までとする。

六、収録決定は、竹富町史編集委員会が行います。

七、収録の場合添削することがあります。

八、収録された方には、冊子、戦争体験記録と編集取材協力記念タオルを進呈します。

九、提出した原稿は、返却いたしません。

十、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和一九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、下記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十一、聞き書きをしてもらいたい方も下記へご連絡下さい。

連絡先：
〒九〇七
沖縄県石垣市字大川一〇番地
竹富町役場（町史編集室）
☎　〇九八〇八―二―九九八五

第十一巻資料編「新聞集成」発刊要綱

―はじめに―

本巻は竹富町史編集基本構想及び編集基本計画等を踏まえ竹富町史第十一巻資料編「新聞集成」(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)として編さんする。

本町の第二次基本構想の中で謳われている将来像「日本最南端の大自然と文化の町―自然・文化・未来」の中、文化については、文化の息づくまちづくり―伝統と歴史を背景に生まれた、ゆたかな文化をまもり、さらに新しい時代の潮流に対応した創造的な町を創りあげていくためには、やはり歴史に対する明確な判断が重要になってくる。私達は先人が築いてきた歴史を考察していくことによって、現在を正しく認識することができ、明日のわが竹富町のあるべき姿を展望することができます。

新聞は、歴史のひだに埋もれがちな、普通の歴史書では容易にみられない小さな事柄や事件などが数多く記録しており、私達は、日々流転してやまない世の姿を垣間みることができる。そういう記事を読むことによって、文化の移り変わっていく人間の思考形態や生活様式等、明日を指向しながら生きる私達に時代的に多くのことを示唆してくれます。

本県での新聞の登場は一八九三年(明治二六年)琉球新報が創刊、八重山では、一九一七年(大正六年)に先嶋新聞の創刊号が発行された。琉球新報については、明治三一年以降の新聞が国立国会図書館に保管されそれ以前の記事収録については不存在であります。したがって、明治三一年～大正七年までは、琉球新報等から、大正六年～昭和四七年までは八重山で発行された新聞から政治、経済、社会、文化、教育等、竹富町に関する記事を原則とするが、沖縄県全体、先島、八重山に関係する記事でも、町に関わってくるものや、その状況背景等を知る上で重要な記事について、選択収録し当該新聞集成編を下記によって、編集作業をすすめる。

一、編集方針

(1)記事は政治、経済、文化、教育等に分類して収録するのではなく編年体(年月日順)に配置する。

(2)記事は政治、経済、文化、教育など本町に関するものを原則とするが、沖縄県全体の歴史の動きの中で特に八重山、中でも竹富町に関わるものや、その状況および背景を知る上で重要であれば選択、収録するように努める。

(3)記事は、下記のことを留意して収録する。

①竹富町で起こった出来事は、原則として採用する。

②竹富町出身の人物に関する記事は収録する。

③竹富町の地域、団体、機関が包含さ

れているものは採用する。

④竹富町の出身者が、所属している政党や団体の動きに関する記事は採用する。

⑤民俗や社会制度、社会情勢などで竹富町と共通している記事は、可能な限り採用する。

⑥ただし竹富町に関する記事でも原則として窃盗、放火、プライバシー、その他スキャンダル的なものは採用しない。

二、対象新聞

本資料編は、次の戦前、戦後、発刊された新聞から記事を取捨選択して収録する。

□琉球新報　明治三一年～大正七年

□沖縄毎日新聞　明治四一年～大正三年

□沖縄日報　昭和十一年～昭和十五年

□先嶋新聞　大正六年～大正十五年

□八重山新報　大正十年～昭和九年

□八重山民報　昭和七年～昭和十一年

□先嶋朝日新聞　昭和三年～昭和十五年

□海南時報　昭和十年～昭和二十年

□八重山毎日新聞　昭和二十五年～昭和四七年

□その他、八重山で発刊された新聞

三、編別構成

(1)「新聞集成」は次の三編に分けて発刊する。

①新聞集成Ⅰ：明治・大正編

（明治三一年～大正一五年）平成五年発刊

②新聞集成Ⅱ：昭和戦前編

（昭和元年～昭和二〇年）平成六年発刊

③新聞集成Ⅲ：昭和戦後編

（昭和二一年～昭和四七年）平成八年発刊

四、発刊スケジュール

(1)新聞資料の活用

①『琉球新報』『沖縄日報』『八重山新報』『海南時報』は当町史編集室所蔵マイクロフィルム影印本、『先嶋新聞』『八重山民報』『先嶋朝日新聞』は石垣市立図書館所蔵マイクロフィルム影印本を使用。

②『沖縄毎日新聞』は平成四年度にマイクロフィルム影印本を架蔵予定。

(2)掲載記事の選定作業

①関係新聞記事を抽出、コピーしB4台紙に貼付け。

②記事事項の一覧表を作成。

③編集室で探索した第一次、第二次選択記事を専門委員に送付し採用、検討、不採用とランク付け。

④専門委員会で収録記事を検討し最終的に編集委員会で決定。

(3)収録記事の印字

(4)不明文字は所蔵機関で原紙照合。

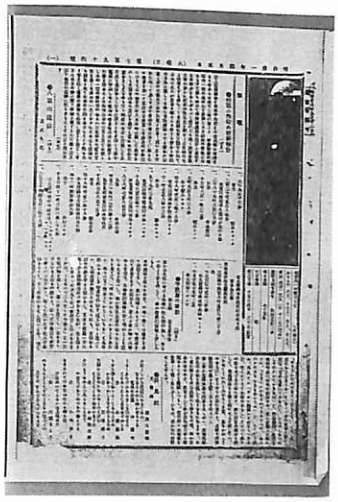
(2)不採用記事の目録を作成。

(6)竹富町関係の略年表を作成。

(7)索引等の付録の作成。

(8)印刷、製本。

――戦前の新聞――



〔琉球新報〕
沖縄の最初の新聞である。明治二六年九月十五日、発刊。創刊者は国王尚泰の四男尚順

〔先嶋新聞〕
八重山で最初の新聞。大正六年四月十五日創刊。社長は松下晩翠。旬刊紙で発刊された。

〔八重山新報〕
那覇市出身の比嘉統熙が大正十年二月、地元有力者を支援に創刊。昭和九年に廃刊した。

〔先嶋朝日新聞〕
「先嶋新聞」を継承して昭和二年に創刊。社長は久高将教、菊地伝市。同十五年廃刊。

〔八重山民報〕
富川盛全を編集人に昭和七年一月、創刊。政治機関紙の要素が強く同十一年に廃刊。

〔海南時報〕
浦添為貴を社長に昭和十年創刊。戦争激化で二十年に休刊。翌年再刊したが三四年に廃刊。

写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」発刊要綱

一、趣旨（編集に向けて）

「日本最南端の大自然と文化の町」を振興目標に掲げる竹富町は、数多くの島々を抱え、豊かな自然に恵まれているとともに、古い歴史を有している。

先人はこのような自然環境、歴史の中で戦前、戦後を通じて素晴らしい郷土を築きあげてきた。近年、町を取り巻く社会環境も時代の大きなうねりの中で変化している。町は時代の流れと共に著しく発展している。

時代変化の中で写真は貴重な歴史資料である。写真は各時代に発生した事象を時間と空間を区切って、その一瞬を捉え記録している。写真は瞬間の記録であるが、読み込むほどに確かな情報を得ることができる。一枚の写真には地域の歴史、人々の人生ドラマや思い出が込められている。

写真は時代を映し出し、多くのことを語り、見る人に古き時代を想起させる。写真を見る楽しさもここにある。視点を変えると写真は時代を知る記録映像であり〝時代の証言者〟である。このような点を踏まえ写真を収集し、集大成を図ることは重要である。

「写真にみる竹富町のあゆみ」は時代を隔てた町の変貌を知り明治から平成へと時代の流れを追い地域の歴史、文化風土を知ると同時に町民の生活体験等を写真という形像により編集するものである。

写真集の発刊は、町の文化振興に結びつき、町民の歴史認識を深化され文化行政の発展につながる。

二、編集方針

(イ)写真集は「竹富町史」別巻(3)と位置づけ近代から現代に至る竹富町および町民の暮らしを写真によって構成する。

(ロ)竹富町の特色あるテーマに配慮する。

(ハ)戦前の写真が少ないため極力、収録する。

(ニ)収録写真は、地区ごとのバランスを図る。

(ホ)グレードの高い写真集に工夫する。

(ヘ)行政機関、学校、団体および町民の生活の移り変わりを伝える写真を数多く収録する。

(ト)歴史、文化、民俗資料として活用できるように工夫する。

三、編集方法

歴史的流れ、年代、地区、事象をタテ軸、ヨコ軸にすることを年頭に置き写真を選択する。

(イ)年代を追って写真を構成する。

戦前の写真は多くない。事象も限定されている。最も古い写真が教育関係で一九一〇年（明治四三年）に撮ったものである。この方法では年代空白が生じるが、写真の歴史性を勘案

した時、時代の流れを把握できる。

(ロ)各テーマに即してその枠内で時期ごとに写真構成する。

写真を事象別に区分する。

(ハ)事象

・集落　・生活　・冠婚葬祭　・教育　・産業　・スポーツ　・交通　・入植　・炭鉱　・文化財　・自然　・行政　・戦争　・マラリア・祭祀　家族・戦跡　・郷友会　・人物など。

四、発行年度：平成四年度

五、発行部数：一五〇〇部

六、印刷仕様

(1) 名　称：写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」

(2) 版　型：A四版

(3) 収録写真：約八〇〇枚

(4) 頁　数：約三〇〇ページ

(5) 用　紙：つやけしコート紙

(6) 原　稿：モノクロ写真約七五〇枚

カラー写真約五〇枚

(7) 製　版：モノクロ写真は二色トーン製版

(8) 印　字：（電算）写植

(9) 印　刷：モノクロ写真、カラー写真

(10) 校　正：四回

(11) 表　紙：カラー（四色＋特色二）

(12) 製　本：糸かがり　巻き表紙角背

七、その他

先行発刊市町村の写真集を参考にして編集作業に当たる。

写真集発刊に向けて

町史編集室では現在、写真集『写真にみる竹富町のあゆみ』の発刊に向けて写真収集と同時に編集作業を行っています。

写真収集は町内各地区を回り家庭訪問し写真複写をさせていただくほか郷友会、写真家に写真提供、複写を呼びかけ協力をお願いしています。

写真は、時代を映し出し〝時の証言者〟であり歴史、文化を知る貴重な記録形像であります。一枚の写真には、その時代の背景、人々の暮らしなど様々な情報が盛り込まれています。その凝縮された情報を読み取る中で、写真は現代に語りかけてきます。さらに記録された時代、場所を直接伝える力を持っています。写真を見ると時代の流れを把握することができます。重要なことは、写真の持つ〝記録性〟です。

写真集は、生きた資料である写真を用いて町の歴史、文化、風土のほか町民の暮らしの移り変わりを理解しよう、というものです。発刊により町の文化振興を図り、町民の歴史認識が深まることを目指しています。引いてはこれが、文化行政の発展に結びつくと思います。

複写写真は、二千八百枚を超えました。今後、さらに収集していきます。写真集は、竹富町のカラーを打ちだし、平成四年度に発刊する予定です。

《歴史の証言》

浦内川の大洪水

語り手　新盛　浪
　　新盛直吉
聞き手　通事孝作

〈概要〉

西表島西部を流れる浦内川の中流域に稲葉地区がある。同地区は、昭和四十年代まで水田地帯が広がり、黄金穂が波打つ稲作の〝宝庫〟だった。しかし戦前、大規模な製材所が設けられ、軍需要材などを切り出していた。稲葉は、製材所設置により数多くの人々が生活の根拠を置き、定住しキャンプ村を形成した。集落的構えを保持していたのである。住民は、ほとんど製材所に関わり労務員、軍関係徴用の人々で構成され、中には台湾からの出稼ぎ者もいた。村は平穏だったが一九四四年（昭和十九年）、降り続く長雨で暗夢に見舞われた。豪雨により河川は水かさが増して氾濫。濁流水が村を襲撃した。浦内川大洪水である。記録によると発生したのは十一月十一日で、未曽有の洪水は、不気味な音を立てて村を全滅させた。家屋は、ほとんど流失し被害は多大だった。死者も数人出た。大洪水の状況は、どうだったのだろうか。新盛浪さん、直吉さん親子に聞いた。

★★★★★

―浦内川の洪水により被害を受けた稲葉の状況について聞かせてほしいのですが、その前に生年月日を教えて下さい。

浪　私は明治三八年九月二日生まれです。戦前、稲葉にいました。

直吉　私は長男で昭和四年九月九日生まれです。洪水のあった時、十七歳でした。

―稲葉は戦前、どういう場所だったのでしょうか。村があったのでしょうか。

直吉　村というより、会社名は忘れましたが、製材所がありました。

―製材所には何人くらい働いていたのでしょうか。人口は、どのくらいだったのでしょうか。

直吉　当時、確か稲葉には二十五世帯ほど住んでいた、と思います。海軍の兵隊がいて台湾人のほか、宮古など島外の人もおり徴用人夫もいました。

―新盛さんと稲葉との関わりはどうなっていますか。

直吉　父は新盛行雄といい当時、製材所の職員として勤めていました。運材係をしていました。本家は西表島西部の祖納にありました。町指定文化財の新盛家です。

―旦那さんは製材所で勤務だが、その頃、浪さんは…。

直吉　父は移民という形で稲葉に住んでいたが、母は家事のため父と一緒に生活していました。末っ子と、その上の子二人を連れて暮らしていました。兄

弟六人だが、私は学校の関係で祖納にいました。つまり稲葉では親子四人で生活していた訳です。

―稲葉には住み始めたのはいつ頃でしょうか。

直吉　昭和十七年頃だった、と記憶しています。

―浦内川の大洪水による水害ですが実情はどうだったのでしょうか。

浪　洪水が起こったのは午後九時頃だった、と思います。雨は、それまでずっと降り続いていました。寝ていると「避難して下さい」と放送で呼びかけている。外に出よう、とするが河川の水は増え、流れが速いのです。お父さんは、尻まで水に浸っている。「外には出られない。家の中にいた方がよい」というが、家も大変です。水は、どんどん増えてくるのです。飯台の上に畳を載せるが、これもダメです。水位は、次第に高くなってきます。そこで押し入れに上がりました。最後は天井に上がり、茅ぶき家の屋根に穴を開け屋根上に出ました。そこに茅を敷き、毛布をかぶり寝ました。子ども二人も寝かせよう、とするが泣いてどうしようもありません。お父さんはその夜、一睡もしていません。

新盛　浪さん

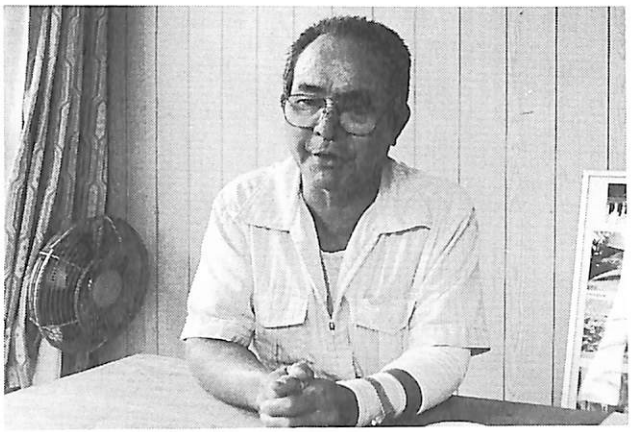
直吉　河川水は九尺も上がった。天井の高さまで水が達すると、家屋は自然と浮き上がってしまうのです。すると今度は流される。だが幸運なことに流された家屋は、樫の木に引っ掛り止まりました。

浪　雨は明け方にはやんでいた。家屋はコットンコットンと音を立てて樫の木に掛っている。夜空が白々と明け、目が覚めるとお父さんが「木に上がれ。大丈夫だ」と言いました。そこで子どもをおんぶして木によじ登った。大変でした。

―洪水で死者は出たのでしょうか。

直吉　ある徴用人夫は、屋根上に乗ったまま流され、河口からそのまま大海へ。一人は濁流に巻かれマングローブ林に引っ掛り死んでいました。三、四人亡くなったのではないでしょうか。洪水の翌朝、稲葉の人々は全員流された、と聞いていました。私は、その頃、祖納消防団にいて救助へ向かったが、山は崩れているし、道路は荒れて歩けるような状態ではありませんでした。橋は、ひとつも残っていません。稲葉に来てみると着の身、着のままの人たちで、中には衣服を水に流され丸裸になっている爺さんもいました。木に上がったまま下りることのできない人もいました。人家は全て流失していました。

山の方にいた人々は、海軍の兵隊がおんぶして避難させ助かった。しかし河川の側にいる人は、水の流れが速くて強くどうしようもありません。そのまま流されていくだけだった。


新盛直吉さん

―しかし浪さんの家族は、家屋が樫の木に引っ掛り助かった訳ですね。

浪　樫の木に家屋が引っ掛る前は生命はない、と思っていました。お父さんは子どものおんぶ帯で四人の体を縛り流されるのを防ぐ、と腹を決めていました。しかし幸いに家屋が樫の木に引っ掛り助かりました。樫の木がなければ生きていたか、どうか分かりません。

直吉　米俵、倉庫はひとつ河を越えて、そのまま流されている。河川の流れは恐ろしいものです。

浪　家屋が音を立てて木に引っ掛っている。下の息子をおんぶし、上の娘は手を引っ張りお父さんへ渡しました。木枝をつかみ毛布を持って樫の木に上がったが、どのようにして上がったか分かりません。お父さんは、あの時、四五、六歳で私は四十歳でした。娘は「怖いよう」と言って泣くし、おんぶしている息子は声をだしません。「死んでいるのでは…」と思い名前を呼ぶと「ひぃー」と返事するので「生きている」とほっとしました。とにかく生きるのか、死ぬのか、おんぶしていても分からず夢中でした。

―なぜ水害は起こったのでしょうか。伐採された材木が原因ともいわれますが…。

直吉　確かに材木のせいもあるかも知れません。しかし河幅が狭く、それに水はけが悪かったことが大きな原因と思います。

―水の力は恐ろしいものですねえ。

直吉　水の力は大変なものです。

―話しは前後しますが、どうやって救助のため稲葉へ行ったのですか。

直吉　洪水で橋が全て流されています。樹木の上を渡り、枝をつかみながらたどり着きました。洪水で子豚、ガチョウは浜に打ち上げられていました。海に流された人の死体は上がらなかったのでしょう。

浪　祖納では「新盛の親子は流されたのでは…」と泣いていた、と聞きました。しかし帰って来ると「死んでいたと思ったら生きていた。よかった」と迎えてくれました。

―樫の木は今どうなっていますか。

直吉　木は、まだあります。大木です。それは、まさしく〝生命の木〟です。

―稲葉の水害は、今から四十八年前に発生しましたが、今ではどれだけの

稲葉にあった製材所

人が知っているのでしょうか。時間が経過すると人々の脳裏から消え、忘れ去られてしまうかも知れません。その意味からも確実に記録する必要があります。

直吉　十年、二十年後になると戦前、稲葉で何があったのか、知る人は少ないでしょう。子どもたちは、稲葉を知らない。過去の出来事は、しっかり押さえるべきだと思います。

―体験を中心にした貴重な証言をしていただき、ありがとうございました。

《文化短信》

◎…西表島の南風見田海岸に建つ「忘勿石（わするないし）之塔」の除幕式が終戦記念日の八月十五日、挙行されました。塔建設は、期成会が募金活動を展開、取り組んだものです。波照間の住民は一九四五年（昭和二十年）、軍命により南風見田に強制疎開させられ、そこで多くの人々がマラリアで死亡しました。「忘勿石」は当時、波照間国民学校長だった故・識名信升さんが痛恨の思いで「忘勿石　ハテルマ　シキナ」と刻んだものです。塔にはマラリア犠牲者を供養し、恒久平和の願いが込められています。

◎…「東アジア風水文化圏に関する学際的研究」に取り組む全国風水研究者会議の第七回研究会が、六月十二日から十五日までの四日間、石垣市と竹富町で開かれました。今回、県内外から約三十人の研究者が出席し、風水に関して研究を深めました。研究会初日は、関西大学の坂出祥仲教授が「中国の呪符について」と題し講演を行い「呪符が分かれば民俗における生活様式、宗教的信条などが分かる」と強調しました。巡検は「八重山風水文書と現地集落との対応関係」と題し行われました。小浜島と竹富島は三日目に実施し『北木山風水記』をもとに現地に入り集落内を回りました。小浜島では嘉弥真島、石垣島が島の外壁的な役割を果たしていることを確認。竹富島では同様に家屋の配置、門構えなどを調べた。

《写真にみるわが町》

波照間の高倉

沖縄の基幹作物・サトウキビが島の経済を支えている波照間島だが、昭和三十年代初期までサトウキビのほか雑穀の栽培が生業を形成していた。キビは小型製糖工場で黒糖化し樽詰めして出荷され粟、麦はサツマイモとともに食生活の必需作物だった。

島では一九六一年（昭和三六年）に現在の波照間製糖工場が建設されるまで稲作栽培も行われていた。山、川がなく水資源に恵まれない島で米ができるのだろうか、と奇異に思われるかも知れないが約三十年前まで水田が広がっていたのである。稲作は、天水田により行われ収穫期になると、金穂が波打った。米、穀物類を貯蔵する施設が高床式の倉である。床を高くして風通しを良くし、病害虫の侵入を防止するのである。『沖縄文化の遺宝』（鎌倉芳太郎著）に一九二七年（同二年）に撮影された高倉が写真掲載されている。同書に「この高床の倉には食料として神聖な籾米及び穀物、その他、稲藁は神事にも用いられ、また貴重な実用品として貯蔵された」とある。

写真の高倉は、西白保家の所有で島村修さんが一九六〇年（同三五年）に撮影したもの。床の高さは約一mだろうか。骨組みは堅固で男性的である。高倉は、農耕史に限らず建築様式を知る貴重な建物である。今では完全に姿を消した。冨嘉部落には礎石が残っている。

（通事孝作）

県地域史協議会研修会

―南風原町で開催―

沖縄県地域史協議会（恩河尚代表）の一九九二年度第一回研修会が、七月十七日午前十時から南風原町立中央公民館で開かれた。今回のテーマは「地域史における民俗編の特徴と課題」。合評会では平良利夫さん（西原町史）、下地和宏さん（城辺町史）、金城善さん（糸満市史）の三人が、民俗編の編集について報告した。

研修会開会では、恩河代表あいさつのあと金城善夫町長が当日、繰り広げられる「津嘉山の大綱引き」を紹介しながら歓迎のことばを述べた。

合評会は、最初に平良さんが報告。「民俗編」発刊の意義について「地域の伝統文化を掘り起こし、先人たちの生き様を記録し、後世に残すこと」と強調。その上で、発刊の大前提は「だれのための民俗誌であるのか」を踏まえて「地域住民が気軽に読め、親しめるものであること」を基本としテーマを展開した。

「民俗編」の特色に関しては①民俗を網羅している②自然環境を取り入れている③二十四字の概況を紹介し〝ミニ字誌〟的な生活を持っている④最近の研究成果が入っている―と述べた。その中で「民俗は、人間の生活史」と位置づけた。

下地さんは「民話」にスポットを当て「民俗編」を発刊する意義を話した。宮古には伝説が多い、といわれる。それを踏まえて「民話編を別刊にしたらどうか、ということになった」と報告し、宮古民話の会に編集を委託したが「編集室と民話の会の民話に対する認識、分類法などに見解の相違があった」と述べた。

「民話編」編集では「どうすれば城辺の特徴が出せるかに重点を置いた」とし音声表記を取り入れた。最後に編集体制について、中断した教訓から「継続して取り組めるスタッフが必要」と強調した。

金城さんは「民俗編」の特徴について〝辞典風〟に編集したことを述べ「目次が索引的な役割をしている」と話した。その中で「目次を見れば捜すべきものがすぐ分かるように工夫した」と述べた。また印刷に至るまでの技術的なことでは「完全原稿にして印刷所に回す。校正に時間を費やしたくない。版下まで編集室で作り、印刷所に送る。そうすると時間的なロスが少ない」と示した。

研修後は、津嘉山小学校で十年ぶりに行われた「津嘉山の大綱曳き」を見学。躍動する祭りを味わった。

《戦跡をたずねて》

水上特攻艇基地

小浜島の港に立ち、視線を南東に注ぐと遠方に白い鳥居が見える。場所は島の聖地・東御嶽で、御嶽は小高い丘に形づくられている。下部には、海軍の水上特攻艇基地が口を開く。基地入口には「元第二六震洋隊戦没者霊位」と記された位牌があり香炉が置かれている。

小浜島には一九四四年（昭和十九年）旅井隊が入り、その後、同隊は石垣島宮良に移り、引き続き引野隊が駐屯し陣地を構築した。基地は、旅井隊の時に設けられ、設営隊の萩野隊が建設に当たった。同隊には徴用された五、六十人の朝鮮人軍夫がいた、といわれる。基地建設には地域住民も駆り出された。作業は人海作戦で行われ、ツルハシ等で砂岩質の丘を掘り、トゥズルモドキを材料にしたモッコで土砂、砂岩を運搬した。

島は樹木が豊富だが戦前、小浜小中学校から製糖工場間の港へ至る道路沿いにはリュウキュウマツが三司官・蔡温の林業政策により植栽され、緑陰を形成し住民の憩いの場だった、という。しかし特攻艇基地を建設するため切り倒され、今では住時の面影は全く残っていない。基地は堅固にするためリュウキュウマツのほか屋敷内のフクギ、畑地にある防風林等も坑木として徴用された。

水上特攻艇は、合板で造られ軽量で長さ五～六㍍。艇首には百㌔の爆雷を装備し時速三十～四十ノットの高速力で突進。敵艦に体当たりし、衝突自爆するように設計されていた。いわば〝人間魚雷〟であり当時、〝自殺舟〟と呼ばれていた。

旅井隊に代わり駐屯した引野隊はヤラマシ（現・海水浴場）に兵舎を構え、軍事訓練を繰り広げ、戦時に備えていた。水上特攻艇基地は、特攻艇を格納するため壕形成になっており、高さ約二・五㍍、幅約三・五㍍、奥行き約三十五㍍の規模である。

特攻艇基地は、敵の目を避けるため、海からは確認できない。部隊が敵艦を発見すると、隊員が特攻艇に乗り込み、目指す敵艦にハイスピードで突っ走るのである。隊員の生命と引き替えに敵にダメージを与えるのだが、どれだけ効果があるのだろうか。住民によると終戦直後、特攻艇運搬レールが海へ延びていた、といわれる。（通事孝作）

大嵩家板証文

所蔵者　大嵩　秀雄
翻　刻　玻名城泰雄
法　量　タテ六四㌢　ヨコ三〇㌢
材　質　イヌマキ

（表）

（裏）

子孫永々江自分新仕明之田地譲書

私事弟子之事ニ而自分田地無之子孫永代江譲渡候様不罷成硝与差迫候付当村西表へしい道与申所之潟原ニ敷地相見立夏林氏小濱與人大史氏小濱目差富村仁屋嘜役之時御役人衆並所中江訟出之上光緒五乙卯年よ里開地相初同十二丙戌年迄八ケ年之間ニ而壱ケ年ニ付五百人余宛都合四千人余之夫入を以裏書絵図之通田地七かや敷明開譲渡置候間子孫永々共右田地軽々敷作得不致様別而気を付相耕永々迄之家宝相成候様可被取計候万一子孫永々至作業之働致油断候而絶ニは年貢諸上納物調兼候訳を似右田地賣拂候者太分之物入を以明開候詮無之候上親先祖之不孝不大形事候条能々其汲受を以永々共入念可被相勤事

光緒十三丁亥年正月吉日

小浜村
小嵩筑登之
同人長男
加武多
孫
秀雄

〈解説〉

小浜島西部の潟原に開墾した田地を子々孫々まで大事にし、家宝にすべき、とする板証文である。田地譲書によると役人に新仕明地の申請を行い一八七九年（明治十二年）から一八八六年（同十九年）までの八年間、合計四千人余の労働力によって新たに田地を設けた。そのため田地は大切な財産であり、軽々しく売買してはならない、と戒めている。当時はまだ人頭税下にあった。（通事孝作）

《文化財探訪》

仲本のウブハー

沖縄では、井戸のことをカー、ガー、ケー、ハー、ジャーなどと呼び、井戸泉、井泉の漢字が当てられる。竹富町の島々には、数多くの井戸がある。古き時代には井戸は、生活にとって欠かせないものであり家造り、墓造りとともに井戸掘りは男性の三大事業といわれた。

井戸の形態は降り井戸から掘り抜き井戸へと変わってきた。黒島では井戸のことを〝ハー〟と呼んでいる。今回、取り上げた〝ウブハー〟は「大きな井戸」の意味を有し、歴史を刻んでいる。島の歴史、民俗を研究し〝ウブハー〟に詳しい宮良勇吉さん（79）を尋ねた。

〝ウブハー〟は仲本にある。宮良さんによると一九一九年（大正八年）頃までウリカー（降り井戸）形式だったといわれる。井戸の周囲は当時、広場があり村の祭り場になっていた。人々は、祭りになると大勢繰り出し熱狂。集落は活気に満ちあふれた。

井戸は、祭りのほか日常生活で使う飲料水にも利用され、水汲み光景が見られた。井戸端会議も盛んで、情報交換の場だった。〝ウブハー〟は歴史を重ね各家に井戸が掘られるようになると、年中祭祀の時に使う神水のみに役割を担うことになった。正月の初願いの時、若水を汲む風習があるが、その時、村人らは先陣を競って出かけた、といわれる。

〝ウブハー〟は、今ではほとんど埋め立てられ、わずかにコンクリートで固められた汲み上げ口が残っているだけ。一九五七年（昭和三二年）には、鳥居が建立され仲本神社として崇拝されている。汲みあげ口の後方には祀り（ほこら）らがあり改築記念碑が建っている。

祀には、香炉が置かれ、水の神がまつられている。井戸は現在では、住時の姿を失い、昔の面影をとどめていない。井戸の周辺は、駐車場になっている。

村井戸を中心にした仲本の歴史は、どんなものだったのだろうか。井戸は、生活の拠点であり、村人が数多く集まる場であるが、今では全く機能を失ってしまった。これも歴史の流れである。駐車場に変貌した広場が、それを物語る。

村人にとって水の確保及び安定供給は長年の懸案だった。それも一九七五年（同五十年）、西表島からの海底送水が実現し水問題は解決。と同時に井戸も御用納めとなった。（通事孝作）

《聖地めぐり》

玻座間御嶽

竹富島の名称は、島に渡来した英雄・他金殿に由来する、といわれる。古文書では『指南広義』『中山伝信録』に「達寄度奴」とあり『球陽』には「武富」と記されている。島の歴史をひも解くと六人の英雄に関する「村立て」の伝説が残っている。

昔、屋久島から根原神殿、沖縄本島から新志花咲成、久間原初金、他金殿、久米島から幸本節瓦、徳之島から塩川殿の頭六人が卒いる集団が相次いで渡来し玻座間、仲筋、久間原、花城、波利若の六村を建て、島のために農作物の実りを招く、各々祖神を勧請し六つの御嶽を設けた。

（『琉球国由来記』巻二十一）

御嶽は、〝六山（ムーヤマ）〟として聖地となり、ヤマニンジュが崇拝している。玻座間御嶽は、村建ての歴史を検証する中で中心的役割を担う。分祀する子御嶽に美崎、親泊の両御嶽を抱え「本の山」「内の山」としての重きを持つ。「粟の神」を祭神として奉り、祈願の対象としている。神名は、「豊見オレン神山」、イビ名は「ハタト大アルジ」である。

豊見おれて神山、降りみそうる、大やん主やん

屋久島から渡り、拝みおうたる、大やん主やん

たばら神どぅぬ降りみそうる大や主やん

などと神口が唱えられる。

トゥニムトゥは根原家。同家は、島では由緒ある家柄で祭祀の中心を成す。神司職は代々、石川家の婦女子が継承している。神司は石川明さんだったが、死去してから継承されていない。神司引き継ぎの問題は近年、島の大きな悩みになっている。石川さんの先代は東門カメで、さらに石川ギラ、石川クヤマまで遡ることができる。

島には二十七の年中祭祀がある。中でも「種子取祭」が最も大きく、祭りでは玻座間御嶽で最初に祈りを挙げ順次、各御嶽を回る。祭祀から同御嶽の重要性を推祭できる。御嶽にはフクギ、テリハボク、タブノキなどの亜熱帯常緑樹が繁茂し林を形づくっている。東側には、「種子取祭」の主会場・世持御嶽がある。祭になると周辺一帯は、大勢の人々でにぎわう。（通事孝作）

《新聞で知る町の今昔》

分村問題

竹富町の分村問題は戦前、戦後二回にわたり起こっている。これは西表西部を町から分離し、西表村として独立。新たな地方自治体を組織し、地域活性化を図ることを目指している。新聞は、分村問題を取り上げ賛成、反対の世論の動向を報道している。

	字名	戸数	男	女	合計
竹富村	竹富	二五三	八二九	八七六	一七〇五
	黒島	一八〇	五三四	五六五	一〇九九
	新城	七二	二二四	二二九	四五三
	小浜	一七七	四二七	四四三	八七〇
	古見	三二	五一	四六	九七
	南風見	一三	一七	一三	三〇
	波照間	一五二	五六四	六一七	一一八一
	計	八七九	二六四六	二七八九	五四三五
西表村	鳩間	六八	一八一	一八七	三六八
	上原	一九	二九	二一	五〇
	西表	二九一	八五〇	四一二	一二六二
	崎山	三二	七五	五九	一三四
	計	四一〇	一一三五	六七九	一八一四

（大正十三年十二月二十一日現在）

（『八重山新報』大正14年3月11日付）

分村問題が最初に出たのは一九二四年（大正十三年）のこと。竹富町は当時、竹富村で人口は七千人を超えている。『八重山新報』は一九二五年、「竹富、西表分村後の村勢及経済」と題して報道。さらに読者の声も紙面に掲載している。なぜ分村が必要であるか。まずは村役場のある竹富島へ渡るには時間がかかり過ぎること。いわば交通利便上の問題。「公私の用を滞び役場へ出頭することは先島より那覇迄旅行するよりも尚ほ数倍の不便苦痛を受けつつあり」との内容で分かる。

次いで、役場職員が島へ渡り滞在する期間が長いこと。これは旅費負担の過重性の問題。このほか行政書類の手続きが遅れること、などを挙げる。経済的には西表炭坑を抱えているほか、船舶が外国へ渡る際、直接帰港できる港湾があり自然が豊かである。ひいては、これが産業の発展につながる、とする。軍事的には、帝国の南方発展政策に伴う施設として海軍の予備港があり炭水を自由自在に供給できる。併せて戦時の際には軍事施設が機能する。そうなると役場が必要となる、との見方である。

行政区域は西表、崎山、上原、鳩間を西表村とし、それ以外の地区を従来通りの竹富村にしている。人口は竹富村に比べ西表村は貧弱だが、移民政策や道路改策で問題性を解消しよう、とする。西表分村案は一九二五年二月二十五日に開会した議会を通過したが結局、頓挫している。新聞は実現できなかった理由を報道していない。

分村問題が戦後、新聞に登場するのは一九四九年（昭和二四年）。『南西新報』『自由民報』が西表分村を取り上げている。分村理由は町政運営上の不合理性、交通問題などで戦前とほとんど同じ。住民の声には〝時機尚早論〟もあり、分村後の財政的破綻を唱える。新聞を読むと世論が二分していたことが分かる。

竹富町の分村問題は、西表西部に限らず他地区でも発生している。竹富村時代の一九三一年（昭和六年）、突如、波照間分村願いが村議会に提出されている。

収蔵図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

受贈図書紹介

寄贈者御芳名	受贈図書名
東村役場	東村史　第一巻通史編
〃	〃　第二巻資料編一
〃	〃　第三巻資料編二
嘉手納町役場	嘉手納町史　資料編一　新聞資料
〃	〃　資料編二　民俗資料
北谷町役場	北谷町史　別巻　近代統計資料
大宜味村役場	大宜味村史　通史編
〃	〃　資料編
知念村役場	知念村史　第一巻　資料編一
〃	〃　第二巻　資料編二
コザ市役所	コザ市史
読谷村役場	読谷村史　第三巻資料編二
沖縄市教育委員会	沖縄市史　第七巻　資料編六・上
与那原町役場	与那原町史　序説　むかし与那原
宜野座村役場	宜野座村誌　第四巻　文献資料
具志川村役場	久米島具志川村史
渡名喜村役場	渡名喜村史　上巻
〃	〃　下巻
平良市役所	第一巻　通史編Ⅱ　戦後編
〃	第四巻　資料編二　近代資料編
〃	第六巻　資料編四　戦後資料集成
〃	第八巻　資料編六
渡嘉敷村役場	渡嘉敷村史　資料編
〃	とかしきの民話
石垣市役所	石垣市史　資料編近代マラリア資料集成
〃	〃　資料編近代4新聞集成1
〃	〃　資料編近代6新聞集成3
〃	〃　八重山関係文献目録
〃	石垣市史研究資料　いしがきの地名
今帰仁村役場	今帰仁村史
美里村役場	美里村史
上野村役場	上野村誌　創立三十周年版
中城村役場	中城村史　別巻1　新聞集成
城辺町役場	城辺町史　第一巻
多良間村役場	多良間村史　第二巻資料編一
〃	〃　第五巻資料編四
下地町役場	下地町誌　町制四十周年記念1
恩納村役場	恩納村誌

石川市役所	石川市誌
南大東村役場	村南大東村誌村制二十周年記念
佐敷村役場	佐敷村誌
糸満市役所	糸満市史　資料編一　新聞資料
名護市役所	写真集　名護―ひとびとの百年
名護市教育委員会	名護の民話
〃	屋部の民話
沖縄市町村三十年史発行委員会	沖縄市町村三十年史　上巻
〃	〃　下巻
石垣市商工会	商工会のあゆみ
外務省	終戦史録
三木健	八重山近代民衆史
〃	八重山研究の人々
〃	喜友名英文詩曲集　潮がれ浜
〃	写真集　西表炭坑
〃	聞書　西表炭坑
〃	西表炭坑概史
〃	沖縄パイン産業史
東京竹富郷友会	たけとみ・創立六十周年記念誌
竹富町老人クラブ連合会	創立二十周年記念誌
沖縄国際大学	沖縄国際大学十年史
浦添市役所	琉球―中国交流史をさぐる

山城善三	原始の島　日本最南端・西表
〃	南島流転　西表炭坑の生活
〃	イリオモテヤマネコ
〃	沖縄郷土歴史読本
〃	琉球歴史夜話
〃	琉球歴史物語
〃	日本歴史新書　琉球の歴史
〃	琉球共産村落の研究
〃	琉球見聞録
〃	琉球の歴史・上
〃	琉球
〃	琉球の研究
〃	異国船琉球来航史の研究
〃	沖縄の悲劇
〃	沖縄県工業要覧
安里功	新城島
東海大学	東海大学紀要　海洋学部　第12号
〃	〃　第16号
〃	〃　第25号
〃	〃　第23号
〃	〃　第27号
〃	東海大学海洋学部業績集　第9集
〃	〃　第12集

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

編著者名	図書名	発行所名
宮城文	八重山生活誌	沖縄タイムス社
大浜永亘	嘉善姓一門と八重山歴史	先島文化研究所
八重山歴史編	八重山歴史	八重山歴史編集委員会
琉球新報社	新琉球史（上）	琉球新報社
〃	〃（下）	〃
石垣市役所	石垣市史資料編近代5	石垣市
沖縄の歴史研究会	沖縄の歴史 第一巻	沖縄教育出版
〃	〃 第二巻	〃
〃	〃 第三巻	〃
村山秀雄	不連続線	八重山毎日新聞社
桃原用永	戦後の八重山歴史	桃原用永
糸洲長良	八重山民謡・古典全集ふるさと	糸洲長良
〃		〃
沖縄考古学会	石器時代の沖縄	新星図書
城間朝教	沖縄の自然・植物誌	沖縄タイムス
沖縄タイムス	写真記録 沖縄戦後史	〃
〃	おきなわの祭り	〃
森口豁	子乞い	マルジュ社
笹森儀助	南島探験	沖縄郷土文化研究所
琉球大学史学会	南島史論	琉球大学史学会
下地馨	宮古の民俗文化	琉球出版会
砂川玄隆	沖縄・先島歴史年表	砂川玄隆
大田静男	八重山戦後史	ひるぎ社
酒井卯作	琉球列島における死霊祭祀の構造	第一書房
窪徳忠先生沖縄調査20周年記念誌論文集刊委員会	沖縄の宗教と民俗	第一書房
法政大学沖縄文化研究所	琉球の方言 助詞特集	法政大学沖縄文研究所
〃	沖縄文化研究 10	〃
〃	〃 11	〃
〃	〃 12	〃
〃	〃 13	〃
〃	〃 14	〃
〃	〃 9	〃
〃	〃 10	〃
沖縄県八重山支庁	八重山要覧 昭和54年	沖縄県

沖縄県教育庁	八重山行政要覧		
〃	沖縄県文化財調査報告		
沖縄タイムス社	沖縄人名録一九九一		
〃	沖縄県企業録一九九一		
山城善三	沖縄事始め世相史辞典		
佐久田繁			
池間栄三	与那国の歴史		
仲原善秀	久米島の歴史と民俗		
沖縄県沖縄史料編集所	沖縄県資料 前近代1		
〃	〃 前近代2		
〃	〃 前近代3		
佐藤惣之助	琉球諸嶋風物詩集		
白井祥平	原色 沖縄海中動物生態図鑑		
矢袋喜一	琉球古来の数学と結縄及記標文字		
田中利典	秘境 西表島		
中山盛茂	のろ調査資料		
山城ヒロ子	ヤマネコ保健婦		
しまうた文化	しまうた第10号		
社会経済研究所	沖縄アルマナック		
琉球文化社	琉球の文化―創刊号		
高良鉄夫	自然との対話		

沖縄県	南島史学会	その歴史と文化3	第一書房
〃	平田義治	沖縄の貝・カニ・エビ	風土記社
沖縄タイムス社	多和田真淳	薬草百科	新星図書出版
〃	大田文子		
月刊沖縄社	初島佳彦	琉球の植物	講談社
	中島邦雄		
池間栄三	天野鉄雄	図鑑 琉球列島有用樹木誌	沖縄出版
第一書房			
沖縄県教育委員会	栗林慧	沖縄の昆虫	学研
〃	島尾敏雄	島尾敏雄非小説集成2	冬樹社
〃		第二巻南島編II	
海風社	月刊沖縄社	続・沖縄の文化財	月刊沖縄社
沖縄教育出版	新城俊昭	南ぬ島旅情	那覇出版社
	太田良博	異説・沖縄史	月刊沖縄社
沖縄書籍販売社	星 勲	西表島のむかし話	ひるぎ社
	八重山文化研究会	八重山文化論集	八重山文化研究会
新星図書出版	木崎甲子郎	沖縄の自然	平凡社
ボーダーインク	南島地名研究センター	南島の地名 第2集	沖縄出版
山城ヒロ子		南島の地名 第3集	沖縄出版
しまうた文化研究会		南島の地名 第4集	ボーダーインク
社会経済研究所	琉球新報社	郷友会	新報出版
琉球文化社			
琉球新報社			

業務日誌

■一九九一（平成三）年

九月十四日

沖縄県地域史協議会臨時総会、研修会。（安里、登野原、参加、多良間村で開催十六日まで）。

九月三〇日

・図書購入「のろ調査資料」外二九冊蔵書。

・古写真、本町（民俗・芸能）関係五〇枚、元早稲田大学教授・本田安次氏提供。

十月一日

新聞資料記事収録候補六八〇件、第三次選択のため編集専門委員八氏へ依頼（第一回目）。

十月四日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）波照間出張（新盛、通事、五日まで）。

十月十二日

琉球史フォーラム考古学の時代区分、名護市教育委員会主催研修会。（安里参加十三日まで）。

十月十五日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）小浜島出張（新盛、通事、日帰り）。

十月十七日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）古見、大原出張（安里、登野原、日帰り）。

十月十八日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）黒島出張（新盛、通事、一九日まで）。

十月二二日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）西表西部地区出張（新盛、通事、二三日まで）。

十一月一日

古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）竹富島出張（新盛、通事、二日まで）。

十一月五日

喜舎場家文庫、新聞資料等、複製転載内諾交渉のため喜舎場一隆氏（琉球大学教授）を訪ね琉大へ小浜助役、安里同行で出張、六日まで。

十一月七日

新聞資料記事収録候補、第三次選択で七五九件編集専門委員八氏へ依頼（第二回目）。

十一月十六日

竹富島種子取祭。写真撮影及び資料収集で出張（通事、一七日まで）。

十一月十八日
図書資料の贈呈式（町長室）故前竹富町長瀬戸弘氏生前蔵書の中から歴史関係書籍六〇冊、行政資料綴八七冊（大正三年～昭和一五年）、古新聞八重山関係コピー綴八七冊（大正六年～昭和一八年）その他行政関係スクラップ綴六五冊、書庫上下（一式）。妻瀬戸榮子夫人から寄贈〈本町編集委員山盛直氏の取り計らいで〉。
十一月二二日
第二回町史編集専門委員会開催。議題(1)新聞集成発刊要綱について、その他三件。
十一月三〇日
第一回デンサ節大会、写真撮影及び資料収集、上原出張（通事、十二月一日まで）。
十二月一日
第一回「写真にみる竹富町のあゆみ展」大原、離島振興総合センターにて開催。大原出張（安里、新盛、通事、登野原、二日まで）。
十二月五日
新聞資料記事収録候補、第三次選択五四七件編集専門委員八氏へ依頼（第三回目）。

■一九九二（平成四）年
一月十四日
新聞資料記事収録候補、第三次選択五〇七件編集専門委員八氏へ依頼（第四回目）。
一月十七日
東京国立博物館主催「海上の道」沖縄の歴史とシンポジウム及び沖縄復帰二〇周年記念特別展、国立公文書館等視察研修（安里参加一九日まで）。
一月十七日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）黒島出張（新盛、通事、日帰り）。
一月十九日
第二六回市町村新採用職員研修会（沖縄県自治研修所）新盛参加二五日まで。
一月二九日
古写真収集、沖縄本島郷友会及び沖縄写真連盟会長（金城棟永）宅訪問。写真提供の協力を依頼、写真集先行発刊市の宜野湾市教育委員会文化課視察研修。（新盛、通事二月一日まで。）
二月四日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）黒島出張（新盛、通事、日帰り）。
二月五日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）大原地区出張（新盛、通事、日帰り）。
二月六日
新聞資料記事収録候補、第三次選択五四三件編集専門委員

八氏へ依頼（第五回目）。
二月十五日
八重山毎日新聞（昭和二五年～昭和四一年）マイクロ影印複製本四九冊（沖縄マイクロセンター納品）蔵書。
二月十七日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）波照間島出張（新盛、通事、一八日まで）。
二月二九日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）竹富島（新盛、通事、日帰り）。
三月三日
行政文書分類整理編さん保存業務委託。（南山舎代表上江洲儀正）。
三月五日
古写真収集協力PRのためNHKイブニンクネットワークおきなわ・アイランドトピックス（午後六時四五分）放映。
三月一一日
沖縄県地域史協議会総会、研修会参加（新盛、通事、宜野座村、一二日まで）。
三月三一日
竹富町史だより創刊号発行。一八〇〇冊（町全戸へ配布）
三月三一日
映像でつづる「昭和の記録」NHKビデオテープ全三二巻購入。

四月七日
新聞資料記事収録候補、第三次選択五四三件編集専門委員八氏へ依頼（第六回目）。
四月九日
那覇在町出身、郷友会より古写真、資料収集のため那覇出張（安里、一〇日まで）。
五月一三日
国立歴史民族博物館、国立公文書館、資料収集及び視察研修、安里参加（東京都、千葉県）。
五月一六日
「琉球新報」「沖縄日報」影印複製本七冊納品、蔵書。
六月一日
斜里町立知床博物館（姉妹町）より博物館ひろば外四三冊寄贈。
六月九日
古写真収集及び複写撮影（各家庭訪問）西表西部地区出張（新盛、通事、一〇日まで）。
六月一三日
第七回全国風水研究者会議。風水巡検〈小浜、竹富〉（安里、通事参加十四日まで）。
六月一四日
国立国会図書館寄贈資料の図書選書、県立図書館において八五冊受領（新盛、通事、那覇出張一五日まで）。

編集後記

▼『竹富町史だより』第二号が、出来上がりました。第五回編集委員会で「戦争体験記録」「新聞集成」「写真集」の発刊要綱がまとまり今後、編集、発刊に向けてスパートをかけます。最初は今年度発刊予定の「写真集」で現在、写真収と併せて写真選択を行っています。

▼「戦争体験記録」は八重山戦の実相を究明していこう、というもので今後、具体的に聞き取り調査等を開始します。「新聞集成」は近日中に明治・大正編・昭和戦前編の掲載記事件数が決まります。編集室職員は四人で少数ながらも頑張っています。

▼「歴史の証言」は、埋もれた歴史を掘り起こし、町史に刻み込んでいくことを目指しています。今回、新たな発見をしました。古文書資料の発掘を行っていますが今号では板証文を紹介すすことができました。次回からコラム風のカコミ記事も入れる予定です。

竹富町史だより　第２号

平成４年９月30日　発行

編集発行　竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎09808－２－9985

印　刷　八島印刷